

36 “SERAT TARIMPON JAMPI” とインドネシアの伝統医療

安部 郁子

公益財団法人 研医会

筆者は家族の仕事の関係で、2015年から2年ほどの間、インドネシアに渡航する機会がたびたびあったので、現地の伝統医療や伝統医薬について調査した。

【方法】 インドネシア国立図書館・国立ボゴール植物園・マカッサル果樹公園・リトルワールド園内図書館などを訪ねて伝統医療や伝統医薬に関する資料を探した。

【結果】 インドネシア国立図書館を訪ねた際、インドネシアの伝統的薬湯とも言えるジャムウについて調べたいと伝えたところ、同じ建物内に勤めるジャムウ処方書の専門家である Endang Sumarsih 女史を紹介された。エンダン先生は18世紀ジャワ語の処方集を現代語へと訳された方で、“SERAT TARIMPON JAMPI” (2010) と “SERAT TARIMPON JAMPI JAWI” (2012) というご自身のまとめられた冊子をくださった。いずれも Perpustakaan Nasional RI. (インドネシア国立図書館) から発行された冊子であるが、市販はしていないということだった。この処方集の元となったのは1875年 Surakarta で作られた本で、古いものはバイタラ葉に書かれているとも聞いた。スラカルタはジャワの王族のいた地で、同じく王宮のあったジョグジャカルタとともに伝統文化の色濃く残る街である。国立図書館ではこうしたバイタラ葉の文書も所蔵しているそうである。

国立図書館の蔵書リストでいくつかの生薬関連書物の閲覧を希望したところ、すべてがボゴール植物園の図書館にある、との答えであったため、ボゴールへと向かった。ボゴール植物園はイギリス人ラッセルの夫人が園長をしていたという植物園で、インドネシアのコーヒー栽培や苺栽培の研究を最初に手掛けたところでもある。今は熱帯特有の巨木や人が乗れるほど大きなオオオニバス、また人の背丈ほどにもなるショクダイオオコンニャクなど日本人にとっては珍しいものがあり、市民の憩いの場でもある。ここの図書館に行けば古い文献もあると考えたが、結果的には現代書しかなく、漢字文献はないということであった。インドネシアでは1965年以降、中国語新聞が禁止され、漢字で書かれた書籍の輸入や漢字を用いた印刷物の持込みも禁止されたという。このことで、図書館などでもすべて漢字文献は一掃されてしまったらしい。

インドネシアでは今でもジャムウという昔ながらの薬湯があり、籠に幾種類かを瓶詰にして売り歩く姿を見る。また、ジョグジャカルタでは村の小さなジャムウ店にたくさんの人が立ち寄って自分の体調にあったジャムウを飲んでいるのを見た。試飲もしたが、甘い暖かい飲み物であった。地元の人々は有精卵を入れる人もいる。薬局ではこうしたジャムウを瓶入りやティーバック、パウダーの形で売っており、肥満、胃弱、婦人科用など効用ごとに分かれている。風邪などの軽い病気はジャムウやコインとオイルで肌をこする擦過療法で治すとも聞いた。

【考察】 エンダン先生はジャムウの処方には中国医学からの影響があるとされていた。一方、ジャムウで使われる植物とアーユルヴェーダで使う植物は似ているように思われる。この二つの大きな医学の影響がインドネシアでどのように関わり、発展、融合していったかを次に考えたい。“3500 Plant Species of the Botanic Gardens of Indonesia” という先の大統領ユドヨノ氏の夫人が出版したという植物図鑑を見るとかなりの割合で medicinal plant と書かれている。インドネシアの人々が培ってきた医療と植物の関わり方には、とても密接なものがあると感じている。